

〔巻頭言〕

## 家族とともに創る家族看護学

岩手県立大学看護学部

横 田 碧

日本家族看護学会学術集会も第9回を迎え、来年はいよいよ2桁の大台にのることになる。今までの学術集会は多くの場合、中央での開催であったが、愛知県・三重県に次いで、今回、北の岩手県でも開催されることになった。これで、長く広がる日本列島の各地にその足跡をしるすことになる。

「温故知新」との言葉もあるように、時に振り返り、所を新たにして、現在までの家族看護学の発展過程の流れを総括すると共に、各地方で地道におこなわれている家族看護実践にかかわる草の根の活動を掘り起こし、それらを「家族看護学」のキーワードに位置づけながら、広く理論化を図っていく必要がある時期だと思う。

人間は誰もが家族と共にする人生があり、他者の家族と出会い、ふれ合ってゆく看護実践がある。日本中に散らばる多くの看護職の中に、家族看護学の種があり、その萌芽がある。しかしそれは、1人1人の

人生経験や日々の看護実践の中に秘められたままで埋もれ続けている。

日本家族看護学会がそれらを結集し、多様な実践を突き合わせながら、「家族看護学」の柱のもとに集約し、整理して、広く深く高く、再構築していくことが必要となっている。

実践は理論によってその意味を見出し、現実の現場を固めた上での発展へとつながる。また、理論は多くの実践を集約し再整理することによってその精度を高め、現実に生起している現象を豊かに説明し得る原理へと練り上げられていく。このことにより、多くの看護職が家族看護学の理論を学び、それを使いこなせるようになり、実践の中で活用していくことによって、その効果が確かめられ、ひいては患者家族のQOLの向上に貢献していけるであろう。対象者に役立つ学問は、応用科学の領域ではその存在意義を問われることになるのであると考える。